

IV 市内の植物

1 目につく植物

アレチウリ 〔荒地瓜〕（ウリ科・一年草 *Sicyos angulatus*

熱気がむんむんする夏の多摩川べりや中州に、一面に広がる見事なつる草の群を見つけることがある。地這いのウリ畑かと近づいてみると、雄花の集まった細長い花序といい、数個集まったへん平な実といい、ウリ科の植物とは似つかわしくないの二度驚かされる。短毛でざらつく実を一つ取ってつぶしてみると、うすい果肉の中から一個の種子がぷつんと飛び出す。1952年に静岡の清水港から日本に上陸した帰化植物。福生市では昭和50年頃から急に増えはじめてきた。

（栗原）



イタドリ 〔疼取〕（タデ科・多年草）

Polygonum cuspidatum

陽当りのよい鉄道線路沿いや多摩川の堤防上、熊川団地下から西へのびる段丘崖のいたるところに見られる。春新しい若茎をしゃぶると酸味があり、のどを潤してくれる。雌雄異株。各地の荒地などに先駆植生として見られ、これだけで大群落をつくっているところもよくある。戦争中タバコが買えない時、父がこのイタドリの葉を代用品として吸っていたのを思い出す。

（安川）



オオブタクサ 〔大豚草〕（キク科・一年草）

Ambrosia trifida

多摩川の土手、五日市線線路沿いの草地に多く見られる。草丈は2 m以上にもなり、葉がクワの葉に似ていることから一名クワモドキとも言われている。雄花・雌花の別があり、夏から秋にかけて穂状の黄色い花をつける。ブタクサと同様、この花粉は鼻炎、ゼンソク等のアレルギーの原因になっている。北米原産の繁殖力の強い植物で、戦後日本に帰化し全国的に広がった。

（大串）



オドリコソウ [踊子草] (シソ科・多年草)

Lamium album L. var. *barbatum*

春、熊川神社から南田園に下る坂の南斜面に群生する。踊子のような形の花をとって吸うとその蜜の甘さに驚く。竹やぶの縁辺部などあまり踏み荒らされていないややしめり気のある所に群生する。これと殆んど同じ形をしていて小型のものはヒメオドリコソウと言ひ、畑や道ばた、野原等によく見られる。ヒメオドリコソウの方が個体数が多い。(安川)



オランダガラシ [和蘭芥] (アブラナ科・多年草)

Rorippa Nasturtium-aquaticum

多摩川の水辺に密生して散在しているが、とりわけ福生団地や福生コンクリートKK付近の川べりに多く見られる。最近になって急に増えはじめてきた帰化植物で、葉をかむとカラシのようなからみがあるのでこの名がついた。水の中に白い根を出し、夏になると白い小さな花をつける。茎は中空で、葉は大きくなると波打つように凹凸になるが、小さい時はこの波がない。冬でも枯れずに青々としている。フランス語でクレソンといい西洋料理につかわれ店頭で売られている。(増岡)



ガマ [蒲] (イネ科・多年草) *Typha latifolia*

最近めったにみられなくなった植物であるが、福生では五日市線鉄橋下の多摩川にある水たまりにヒメガマ・ミクリ等と共に群生している。昭和57年8月の台風による増水によって流され、その数が非常に少なくなってしまった。夏になると2m近くまで伸びた茎の先に、雄花を上雌花を下に分けた穂をつけ、雌花は熟すと茶褐色になる。この「穂綿」につつまれて赤裸になった白ウサギが、大国主命によって救われた物語は有名である。

(大串)



カワラヨモギ〔河原蓬〕(キク科・多年草)

Artemisia capillaris

川原に生えるヨモギということからその名がつけられたが、葉はコスモスによく似ている。市内では川の流れの面より1、2段高い砂礫地に生えている。強そうに見えるが、最近では市内における分布範囲も半減し、永田橋上流右岸にまばらに見られるくらいである。花は夏から秋に咲き黄白色で目立たないが、冬には枯れた茎が残っているのが目立つ。また、果穂を乾燥させたものが黄疸の薬に使われ、インチンコウと呼ばれている。

(滝上)



キクイモ〔菊芋〕(キク科・多年草)

Helianthus tuberosus

夏の河原にツルヨシなどに混って黄色いコスモスの花に似た大型の花を咲かせている。背丈は1.5m~2mにも達し、ざらざらしている葉なので見分けがつけ易い。台風による大水のあと、なぎ倒された河原の草木の中で、まず最初に花を咲かせるのはこのキクイモであった。多摩川にはよく群生しているが、人家のまわりではあまり見られない。切り花として生けても花もちが悪い。一見オオハンゴンソウに似ている。

(安川)



クサヨシ〔草葦〕(イネ科・多年草)

Phalaris Arundinacea

湿地や河原の流れに近い、日あたりのよい砂礫地に群生して、ヤマアワやイヌビエなどに似た穂をつける。花の色は淡緑色から紫色を帯び、初夏に開花する。市内の川原では各所に生えている。クサヨシの生える砂礫地から続く砂地には、クサヨシによく似たツルヨシが繁っている。上を走るつるが四方に出ているのがツルヨシである。クサヨシの名は、ヨシに似た小さくやわらかい草からきている。

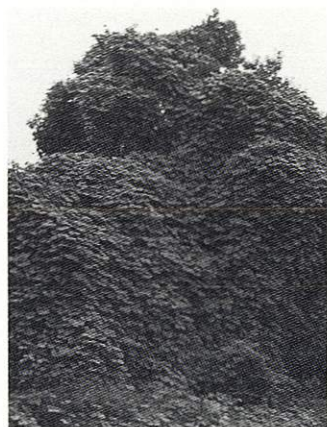
(滝上)



クズ 〔葛〕 (マメ科・多年草)

Pueraria Thunbergiana

林のへり、陽のよくあたる段丘崖、新しく山土を盛った所などいたる所によく繁茂する。夏から秋にかけて紫色の花をつける。春の新芽は料理の仕方では意外とおいしく食べられ、根は昔から乾燥させて粉にし、いわゆる「くず粉」をとっていたという事はあまり知られていない。現在では殆んど利用価値がなく繁りすぎてやっかいものの扱いにされている。(安川)



ススキ 〔芒〕 (イネ科・多年草)

Miscanthus sinensis

秋の七草の一つである。秋風に波うつススキの穂は、秋の深まりとともに白さを増し、特に夕暮時のススキは何か秋の淋しさを感じさせる。福生でもまだいたるところにみられるが、特に立川基地周辺、多摩川等には群生している。細長くスラッと伸びた葉の中には、水晶の成分と同じ珪酸という硬い物質が多くふくまれ、葉の縁にはかたい鋸歯があるためよく手足を切ることがある。秋の野山をかざる代表的な植物である。(大串)



チガヤ 〔白茅〕 (イネ科・多年草)

Imperata cylindrica

桜の花も散り、ナナホシテントウが草むらをせわしく動き回る頃、多摩川・玉川上水・鉄道沿いの土手に群生する。白色の絹毛を密生させた細長い穂が、あたり一面に風にゆれる様はすばらしい。少年の頃このあまくやわらかい穂(茅花(ツバナ))をつまみ、引きぬいてはその柔らかな絹毛を口にほおばったものである。花後は茎葉が成長して、大きいものは1mほどになる。お盆に敷物に編んだり縄になうカヤはこのチガヤである。



(栗原)

ツルマンネングサ 〔蔓万年草〕 (ベンケイソウ科・多年草)

Sedum sarmentosum

福生市内の各所で見られるが、福生団地の土手では群落をつくって生育している。最近ではコモチマンネングサよりも多く見られるようになった。形はマツバボタンに似ているが、三枚の葉が輪生し、葉形は剣状である。オノマンネングサと共に庭などに植えられることがある。ホタルが多くいた頃は、この草が多肉質で切ってもなかなか枯れないためかごの中に入れておき、ホタルを長生きさせるのにつかわれた。そのため一名ホタル草とも呼ばれている。

(増岡)



ビロウドモウズイカ

〔天鵝絨毛蕊花〕 (ゴマノハグサ科・二年草)

Verbascum thapsus

ヨーロッパ原産でニワタバコともいう。一見タバコに似ているからであろう。明治初期に観賞用として渡来し、現在でも栽培されているが、各地で野生化したものが見られる。特に東北地方から北海道に多いが、市内では多摩川河原以外あまり見られず、めずらしい帰化植物といえる。茎にはひれがあり、花序を含めて2 mにも達し、50cmあまりの花序は黄花を夏から秋にかけて咲かせる。葉はビロードを思わせる白毛に被われた特異な姿をしているのですぐわかる。

(加藤)



2 少ない植物

アオミズ 〔青瑞〕（イラクサ科・一年草）

Pilea viridissima

イラクサやカラムシに似ているが、全体が軟質で葉に照りがあり、茎は水気をいっぱい含んでいて透き通った緑色に見える。林縁の湿地に生える。福生五小裏の水が湧出しているところに群落を作っていて、その中には他の草は入り込むことができないほどである。この他に熊川神社下の湿地にもあるが、ここはそれほど多くはない。同型のものにミズがあるが、アオミズはこれより大きく3本の葉脈がはっきりしている。2つとも食用となる。(増岡)



ウマノスズクサ 〔馬の鈴草〕（ウマノスズクサ科・多年草）

Aristolochia debilis

果実の形の面白さを馬の首にかけると見たとこの名がつけられた。盛夏、葉の付け根から一本の花柄を伸ばし、その先にラッパ状のがくを開口して、内部におしべ、めしべをつける。この草を食べるジャコウアゲハの幼虫は、この草と同じ独特の臭いを出して敵から身を守る。ジャコウアゲハの運命は、この種の盛衰により左右せられる。市内では青梅線線路沿いのわずか1か所に見られた。

(栗原)



オオバクサフジ 〔大葉草藤〕（マメ科・多年草）

Vicia Pseudo-Orobus

フジのような葉をもち、その先に巻きひげをつけることがある。秋に紫色のマメ科特有の蝶型花を繖状につけるが、フジとは逆にその花序を立てる。山麓や原野に生えることが多く、市内では今のところ拝島駅北側の草地に群落が見られるだけである。しかしそれほどめずらしい植物とも思えず、よく探せば多摩川や玉川上水の土手、草地で見つかると思える。

(池田)



オケラ 〔朮〕(キク科・多年草)

Atractylis ovata

万葉の昔から「ウケラ」と呼ばれ歌などにも詠まれた植物で、かつての武蔵野では少しもめずらしくなかったが、今では丘陵や山地の雑木林へ行かないとなかなか見られない。市内では玉川上水べりと拝島駅近くの雑木林の中に幾株が見られる程度になった。一見コウヤボウキの花と見まちがえるが、オケラの方がやや大型で、がくを網状の苞で包んでいる。花期は9月から10月。

(安川)



オニノヤガラ 〔鬼の矢幹〕(ラン科・多年草)

Gastrodia elata

ナラタケ菌と共生するランで、地下にはジャガイモ状の塊茎がある。直立した花茎を「矢柄」(矢の軸)にたとえ、太いので鬼の使うような矢という意味で「鬼の矢柄」と名付けたものであろう。ほかにヌスビトノアシ、テンマなどという名もある。初夏に黄褐色の花をつける。強壯、鎮痛の漢方薬として採取されその数が激減し、現在、多摩地区ではめずらしい植物の部類に入り、市内でも貴重である。

(加藤)



カナビキソウ 〔鉄引草〕(ビャクダン科・多年草)

Thesium chinense

普通は日当りのよい丘陵の草地に多く生える半寄生の植物であるが、市内では、河原の砂泥まじりの所にノシバの根に寄生根を出して生えている。数年前までは市内の各所に生えていたが、分布範囲はどんどん減ってきて、羽村町境の多摩川河原の砂利面に続く砂地と五日市線鉄橋下の少し湿った沼地の近くに見られるくらいである。春から夏にかけ針のような細い互生した葉の付け根に白い花をつける。陸に生えた海藻のようである。

(滝上)



カワラケツメイ 〔河原決明〕（マメ科・一年草）

Cassia mimosoides

マメ科の草本といえば、独特な蝶型の花をつけるものと思っていて、この草の黄色い5枚の花びらを見ると、バラ科なのではと思ってしまう。しかし、実を見ればこれが間違いなくマメ科の草本であることがわかる。名前にはカワラとついているが河原よりもむしろ日当たりの良い草地や土手に良く生え、市内でも草地に群落をつくっている。

（池田）



カワラサイコ 〔河原柴胡〕（バラ科・多年草）

Potentilla chinensis

多摩川の土手の一部に、太い直根を伸ばし、わずかではあるが生育していた。しかし、昭和54年の調査では確認することはできなかった。夏になると、広がった根出葉の中心から花茎を伸ばし、1 cmくらいのたくさんの黄花をつける。羽状の葉と多花をつけるところは、ツチグリ・キジムシロに似ているが、カワラサイコの葉は切れこみが深く、裏側は白っぽい、サイコは、セリ科の薬用植物ミシマサイコの根に似るところからの命名である。

（栗原）



カワラニガナ 〔河原苦菜〕（キク科・多年草）

Ixeris tamagawaensis

この植物はオオジシバリの葉の先を尖らせ、ニガナの茎・葉を縮小したような感じで、河原の砂礫地に生育する。カワラヨモギの生育面（最も低い面）よりも1、2段高い砂礫地でまばらに生育している。花は夏から秋にかけて咲き、ジシバリによく似ているがつるを出さない。あまり殖えないのは数年おきにくり返す洪水のためと思われる。市内では永田橋上流右岸に生えている。

（滝上）



カワラハハコ〔河原母子〕（キク科・多年草）

Anaphalis yedoensis

名前にカワラを冠するのは生育地の環境にちなんだ名で、市内には前述の4種の他カワラノギク・カワラナデシコ・カワラスゲがある。カワラハハコは春の七草のゴギョウ（ハハコグサ）に似ているが、花は白く、背は高く、大きいものは50cmにもなり、地中に長い直根を伸ばす。昭和54年の調査時に、小石が多く草のまばらな河原にぽつと一本発見できたが、その後は出逢っていない。洪水など環境の変化を受けやすい厳しい条件下に生きる。

（栗原）



キンラン〔金蘭〕（ラン科・多年草）

Cephalanthera falcata

春、雑木林の中を明るくするように散発的に生える地生ランである。花の黄色が金にたとえられたこのランは、かつてはどこにもありふれたものであったが、花時に目につきやすく採取されやすいことや、宅地化の急進によって、多摩地区では少なくなっている。市内でも限られた所にわずかに残っている程度である。長崎出島の医官として日本を訪れたスウェーデンの植物学者チュンベリーは、昭和51年にオランダ商館長の江戸参府に随行し、箱根山中でこれを見つけ自らの名を学名にとどめ世界に紹介した。

（加藤）



ギンラン〔銀蘭〕（ラン科・多年草）

Cephalanthera crecta

ギンランの名はキンランに対するもので、白花を銀にみたてた。キンランと同じく乾きぎみの雑木林を好み、春から初夏にかけて花をつける。これもキンランのようにチュンベリーによって命名され紹介された。市内ではキンランよりも個体数は多いようだが、これも今ではめずらしい部類にはいる。似た種類のササバギンラン（写真）は、丈がさらに大きく、花のすぐ下にある葉状の苞が花序より上に伸びるので区別できる。

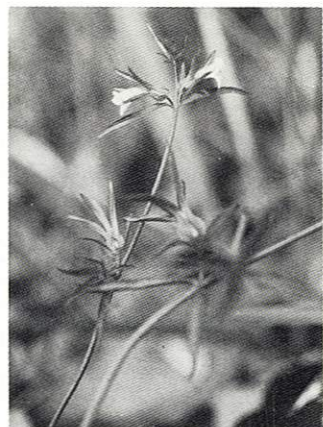
（加藤）



クチナシグサ [梔子草] (ゴマノハグサ科・二年草)

Monochasma Sheareri

実の形がクチナシに似ているのでこの名があるが、春先の若葉の色が赤いことから「カガリビソウ」の別名もある。自分で養分をつくる以外に、他の植物の根からも養分をとる半寄生植物で、丘陵の林のへりなどの比較的日当りの良い場所に生える。市内では林自体が少ないこともあってこの草を見る機会は少なく、あっても草丈が10cmくらいで小さく貧弱である。年間降水量が1800mm以下の地域に生育すると言われる。(池田)



コケリンドウ [苔竜胆] (リンドウ科・二年草)

Gentiana squarrosa

その名のとおおり苔のように小さく地面にはりついている。目を近づけてよく見ると、たしかにリンドウそのものである。市内では陽のよく当たる多摩川堤防の一部にしか見られない。まわりに背の高い草本があればすぐ枯れてしまうほど太陽の光を好む植物なので、蒔り込まれた芝生や石垣の間などに見られる。市内で見られるリンドウ科の植物はこれ1種のみである。(安川)



シオガマガク [塩竈菊] (ゴマノハグサ科・多年草)

Pedicularis resupinata

夏から秋にかけて紅紫色の唇形の花をつける。この植物を最初に市内で観察したのは昭和36年の7月下旬、砂利引込線跡地の多摩川側の斜面で、小形の7個体を見つけた。一般的には、山地性の植物で、草丈が30~60cmになるが、市域内のは18~26cmであった。この種が低地で定着するのは比較的珍しく、山地よりも花色が淡くなり、葉腋から枝を出すことも稀である。興味のある方は、探してみたらどうだろうか。(宮岡)



シロバナタンポポ〔白花蒲公英〕(キク科・多年草)

Taraxacum albidum

在来の日本文字に似ているが別の種類である。タンポポの花は黄色だと思いこんでいて、ふと出逢ったその花が白花だったりすると、「お前、色をまちがえたな」と言いたくなる。昭和56年の調査時には北田園と加美平の道ばたで、2、3株ひっそりと寄り添うように可憐に咲いているのが確認された。早春から初夏にかけて次々と頭花をつけ、花後は花茎が30cmほどに伸びる。果実が熟すと冠毛がぱっと開き白球のタンポポのようになる。(栗原)



シュンラン〔春蘭〕(ラン科・多年草)

Cymbidium goeringii(virescens)

ジジババとかホクロともいわれる地生ランで、雑木林の乾いた所を好む。花期は春で、近隣の丘陵地にはまだ普通に見られるが、市内では適地が少ない上に、近年の園芸趣味の流行で数がかなり少なくなってきている。かわりだねは愛好家の間では貴重なものとされている。また梅・竹・松・蘭の四君子の一つとして、日本画の運筆の練習に一度は描くものである。(加藤)



ジュウニヒトエ〔十二単〕(シソ科・多年草)

Ajuga nipponensis

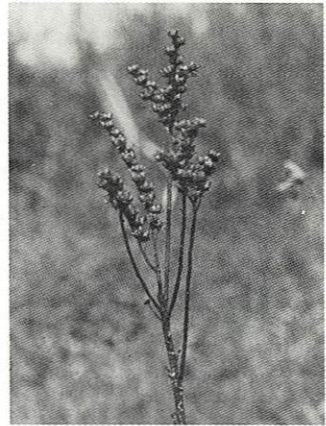
優雅な名前は、早春に出てくる芽の包葉がおり重なる姿を、女官の十二単衣にみたててつけたものである。4・5月になるとたくさんの淡紫色の花を一つの花茎に重ねてきれいに咲かせる。しかし、市内にあるものは環境のためか花の数が少ない。全体が白色の毛で被われ、触るとふわふわした感じがする。羽村町境と拝島駅付近の林に数株ずつ点在している。(増岡)



タコノアシ 〔蛸の足〕 (ペンケイソウ科・多年草)

Penthorum chinense

泥湿地・沼・河原など少し湿ったところに多く生える。市内では五日市線鉄橋下の沼地に数株点在している。多摩地区では絶滅に瀕しており、貴重なものの一つである。名前の由来は、分岐した花序に多数の黄緑色の花をつける姿が吸盤をつけた蛸の足に似ていることからきている。特に、秋に紅葉したところは、ゆでた蛸にそっくりである。昭和57年には台風による洪水のため花を見ることはできなかった。(滝上)



ナンバンギセル 〔南蛮煙管〕 (ハマウツボ科・一年草)

Aeginetia indica

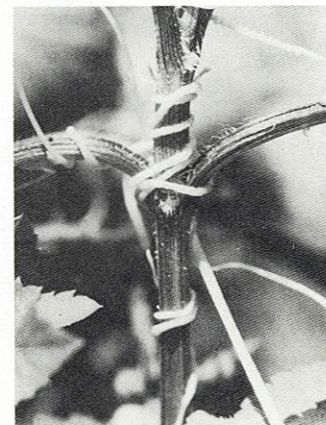
一年生の寄生植物で、ススキ・ミョウガ等の根に寄生する。秋に15~18cmの花柄をのばし淡紫色の花をつける。その形がキセルの雁首に似ていることからこの名がある。また、一名オモイグサとも呼ばれ、「道の辺の尾花が下の思想草…」と万葉集に歌われるように、もの思うやさしい姿を連想させられる。福生では拝島駅近くの五日市線線路ぎわの草地にみられる。最近では、秋祭りの夜店などでもその姿を見かけることがある。(大串)



ネナシカズラ 〔根無葛〕 (ヒルガオ科・一年草)

Cuscuta japonica

マメダオシよりも小形で弱々しく感じられる。ヨモギやハズソウの中に黄褐色の糸屑のようなものがまきついていたら、まちがいなくネナシカズラである。発芽して芽が伸びると、すぐに宿主植物にまつわりつく。この茎は針金状で細く、吸盤を備えていて宿主植物の栄養分を横取りして生活している。完全な寄生植物で、いったん発芽して宿主につきさえすれば、根は無くても生活が可能である。南公園の多摩川寄り一帯と中州に毎年繁殖し、沢山みることができる。(宮岡)



ハタザオ 〔旗竿〕（アブラナ科・二年草）

Arabis glabra

4月から6月にかけて福生団地横の土手に30cm～60cmくらいの高さで、白い花をつけ、名前のとおり旗竿のように直立している。莢が直立する茎と平行に上向きに出るのが特徴で、葉はアブラ葉に似ている。この時期にそばを通ると手にとってみたくなる。そのためであろうか、折られることが多く満足に生育することができない。よく似たヤマハタザオは、花が黄色で葉がちぢれている。

（増岡）



ヒトリシズカ 〔一人静〕（センリョウ科・多年草）

Chloranthus japonicus

源義経の愛妾「静御前」を連想させるほどの美しさを持ち、花穂が一本ということからこの可憐な名前がついた。また、謡曲の「フタリシズカ」に対してつけられたとも考えられている。また、昔の人は化粧道具の眉掃きを思ったのだろうか、マユハキソウ（眉掃草）という呼び名もある。市内ではわずかに残された雑木林に生育し、4月から5月にかけて美しい花を見せるが個体数は少ない。

（加藤）



メハジキ 〔目弾〕（シソ科・二年草）

Leonurus sibiricus

植物として特に珍しい種ではないが、市域内では見る機会の少ない草の一つになった。葉は、ヨモギよりも欠刻が深いので細く感じられ、茎は四角である。花は葉腋につき、茎をとり巻くように花の輪をつくり、段々に重なったようにみえる。この茎は弾力があるので、昔は、目弾きとして子供の遊びに使われた。今では、宮本橋附近に生えている。ほかではあまり見当たらない。株状に集まって生えるので、よく探せばみつけ易い植物である。

（宮岡）



レンリソウ〔連理草〕(マメ科・多年草)

Lathyrus palustris

スズメノエンドウ・カスマグサ・オオクサフジなどは、スイートピーのような蝶花をつける。どれも小型の花を咲かせるが、その中でもレンリソウは最も大きく1cmくらいの紅紫色の鮮やかな花を咲かせる。南公園付近の多摩川土手に多く生育しているが、玉川上水や横田基地近くの芝地にもわずかではあるが生えている。毎年、5・6月の花期には護岸のための草刈りが始まるので、年によっては花を見られずに刈り取られてしまうことがある。

(栗原)

